魅月町・針葉の花

徳山　ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魅月町・針葉の花

【Ｎコード】

Ｎ２００９Ｄ

【作者名】

徳山　ノガタ

【あらすじ】

地方の小都市「魅月町」。大学生の小里一、通称「コリー」は、演劇部の部長にあこがれ、演劇部に入るが…。”町”自身が語る現代ドラマ。

第1章・役者

私の名前は魅月町。みつきちょう、と読む。

「変な名前の人だなぁ」などと思ってはいけない。私は人ではない。「町」だ。まぁ、町を見守っている精霊のようなものだと思ってくれても構わない。いやいや、私の素性なんてどうでもいいだろう。

さて、私――魅月町には、当然ながら多くの人々が生活している。（といっても田舎なので人口はそれ程でもない。）そして人と人が出会えば、そこにドラマが生じる。私はこれから皆さんに、この魅月町で起こったドラマの一つを紹介したいと思う。

タイトルは――そう、【針葉の花（しんようのはな）】

さぁ、ご覧あれ！

小里（おざと）　一（はじめ）は今春、大学生になった。入学式やオリエンテーション等の行事を一通り終え、明日から本格的に授業が始まることになっている。

彼の特徴を簡単に説明しよう。

性格――消極的・非社交的。

成績――高校時代は学内トップクラス。

顔立ち――並の上、と言ったところ。しかしながらその性格ゆえ

に……

女性との交際歴――皆無、である。

そんな男だが、その性格に似合わない「あだ名」を持っていた。

それは……。

「お～い！どこ行くんだコリー！」

そう言ったのは、はじめの幼馴染でひとつ先輩にあたる白戸（しらと）だった。

「その名前はやめてください。何度言わせるつもりですか」

「い～いじゃんかよぉ。小里一、だからコリー。で、どこ行こうとしてるんだ？」

「……帰るんですよ。もう用事はありませんから」

そこで白戸は大きくため息をつく。

「サークル活動見て行こうって気は……」

「ありません。面倒臭い」

出た。「面倒臭い」これがはじめの口癖だ。

「どうせパンフレットとかも見てないんだろ」

「ええ。何も入る気ないですから」

「おぉ～い……。折角のキャンパスライフだぜ？青春だぜ？高校までずっと帰宅部だったんだから大学ぐらいは……。いいサークルあるんだけどよ……」

「帰宅部、大学でも続けます。それに」

「それに？」

「先輩の意図は読めてます。要するに自分のサークルに入って欲しい。新入部員を確保したい、でしょう？」

図星。白戸は演劇部に所属しており、他の部と同様に勧誘合戦に駆り出されているところだった。

「はいはい。コリー君はなんでもお見通しで。しょうがねえなぁ……」

「それじゃあ、僕はこれで」

と、はじめが立ち去ろうとした時――。

「いつまで油を売っている、ハト」

女性の声だ。はじめが振り返ると、この田舎町（自分で言うのもなんだが）には珍しい”大人”を感じさせる女性が、二人に歩いてくるところだった。

「あ、部長。今この新入生勧誘してたところで……」

「見ればわかる。私が言いたいのは、すでに集合時間を5分過ぎているということだ」

「いぃ！？　ヤベッ忘れてた……」

慌てて腕時計を確認する白戸をよそに、その女性ははじめに話しかける。

「うちのハトが迷惑をかけたな。すまない」

「えっ……あ、ハイ……」

……ひとつ言い忘れていた。先にも述べたようにはじめは女性に縁がない。しかし、別に嫌いというわけでもない。この女性はむしろ、はじめの「好みのタイプ」だった。

「あの、ちょっといいですか？　白戸先輩のことをハトって……」

「ああ、それはなぁ」

はじめの望みに反して、白戸が答える。

「白戸を”はくと”って読んで、それを略してハト。わかりやすいだろ？」

「無駄口を叩いている場合か、ハト」

かなりキツイ口調で言葉を遮る。よほど白戸のことを嫌っているらしい。

「失礼した。それでは」

「じゃ、また明日な。コリー」

そう言って演劇部の二人は去って行った。はじめは、その女性の後ろ姿をじっと見つめていた……。

第2章・開幕（前書き）

小里　一　（おざと　はじめ）　通称コリー
１８歳・大学１年。
基本的に人と話をするのは苦手。趣味は読書で、アパートの本棚には文庫本がビッシリ。

第2章・開幕

西条（さいじょう）　壬織（みおり）。４年生。普段はクールで事務的な態度だが、舞台に上がるとどんな役でもこなすことが出来る。また、役者としてだけでなく舞台監督としても有能。とにかく演劇一筋に生きている。

以上が、はじめが演劇に入部して一か月の間に得た演劇部部長の情報である。

もちろん情報源はコイツ。

「いや～。まさかコリーが入ってくれるとは思わなかったなぁ～」

「自分で誘っておいてそれはないでしょう。あと、コリーはやめてください」

「何言ってんだ。もうみんなお前のことコリーって認識してるぜ」

場所は演劇部の部室。これからミーティングを行うところだ。

「えー、先週も言ったとおり、来月新入生をメインにした舞台を演（や）る。脚本は阿倉浪才（あぐらろうさい）先生の小説”神の唄う街”をアレンジしたものだ」

少しだけ説明しよう。魅月町からは、ある二人の著名人が出ている。

一人は今名前が挙がった小説家・阿倉浪才。

もう一人は若手の高名画家・コナガワ。ただし、どちらも今回の話には関係しないので、あまり気にしなくてもいい。

「それで配役だが……キャラクターの性格や皆の練習風景から一応の割り当ては出来ている。配布した脚本の1ページに書いてあるから見てほしい」

脚本をめくり、白戸が声を挙げる。

「お！　コリー、お前主役じゃねーか」

「うるさいぞ、ハト」

「はい……」

部長に睨まれて小さくなる白戸。一方はじめは、わが目の正しさを確かめるのに精一杯だった。――自分が、主役……？と。

「コリー」

「は、はいっ！」

部長の声で正気に戻った。

「さっきも言ったが、配役はこれまでの練習をもとにして考えてある。このストーリーの主役は君が一番適切だということだ。わかったか？」

「は、……はい。頑張ります。」

その日の夜、はじめはただひたすら嬉しかった。部長に会うために入っただけなのに、その部長に主役として選ばれたのだから。

「僕、意外と才能あるのかな……」

興奮して眠れず、独り言を言う。もしも白戸がこのセリフを聞いていたら、きっとこう言うだろう。

「恋の力は偉大だねぇ」と。

翌日から稽古が始まった。

部長の見立て通り、はじめの演技はなかなかのものだった。順調に稽古は進み、本番一週間前に一通り予行練習をすることになった。観客は5人。部員以外の人の前で演じるのは初めてのことだった。

「緊張してっか？　コリー」

控え室で白戸がはじめに声をかける。この演劇は新入生がメインのため、2年生の白戸は裏方である。

「……別に」

「ふーん。ま、たった5人しか見てねぇんだから、ここでビビっちまったら本番なんてとても……」

「何をしている、ハト。お前には反対側の部屋で待機していろと言ったはずだ」

部長が入ってきて叱りつけた。

「スイマセン。頑張れよ～コリー」

だらだらと出て行く白戸を見送り、部長は出演者たちを注目させる。

「予行練習だが、本番と同じように考えてくれ。”見せる”演技を心がけるように」

「ハイッ！」

出演者たちが力強く返事をし、ステージの幕が上がった。

第3章・失意（前書き）

白戸　浩二　（しらと　こうじ）　通称ハト
１９歳・大学2年
自分の恋愛より、人の恋愛をいじくるのが好きなタイプ。「その気になればけっこうモテる」はじめをからかうのが楽しくてしょうがない。

第3章・失意

その日の夕方。はじめや他の部員たちはすでに帰り、部長と白戸だけが残っている。

「部長……やっぱり、コリーダメっすか？」

「……あの調子ではな」

予行練習は、散々な結果に終わった。はじめは演技力こそあるものの、人の視線に慣れていなかったのだ。動きは硬くなり、セリフを忘れ、それは酷いありさまだった。練習が終わった後も誰とも口をきかず、逃げるように帰って行った。

「あれは俺よりひどかったっすねぇ……」

「ハト、一応お前の意見も聞いておく。他にあの役に適任な1年は誰だと思う？」

「えっ……や、やっぱりキャスト変更っすか？　けど今からじゃ時間が……」

「今日のコリーより酷くならなければいい」

はじめを推薦した白戸としては、このキャスト変更は出来れば避けたいところだ。

「いや……その、もう一遍チャンスあげたらどうっすか？アイツ何をするにしても一回目は弱いんですよ。ただ、2回目以降はもう余

裕で……」

ダメ元で口からでまかせをいっているのは明らかだ。しかし、部長はしばらく考え込んで言った。

「……いいだろう。もう一度試してみよう」

「マ、マジっすか！？」

「ただし、方法と合否は私が独断で決定する。それと……」

「それ、と……？」

「コリー本人にもう一度やる気があるのかが問題だな」

そう言って部長は出て行く。ひとり残された白戸も帰り支度をする。

「やる気、ねぇ……アイツ滅茶苦茶落ち込んでたからなぁ……。あこがれの人の前で恥かいたんだからそりゃヘコむわ」と、その時。

「ああ、そうだ」

部長が再び戻ってきた。

「うあっ！？」

「何を驚いている。ハト、コリーの家は知っているか？」

「え、あ、はい。家っつーかアパートですけど」

「もしかしたら明日、コリーは練習に来ないかもしれない。もしそうなったら、一つ頼みたいことがある」

その内容を伝え、部長はすぐに帰って行った。

白戸は確かに帰ったことをを確認し、もう一度独り言を言う。

「でも……ま、そのあこがれの人にチャンス与えられたんだから頑張ってくれるかな」

なんだかんだと、面倒見のいい男である。

翌日。部長の予想通り、はじめは部室に行かなかった。本当は学校自体も休みたかったのだが、一度ひきこもると二度と出てこれないような気がしたらしい。それほどまでに、はじめは心が折れてしまっていた。

（部長が主役を任せてくれたのに……僕は……。たった5人の観客に圧倒されてしまった……）

授業が終わると同時にアパートに帰り、ベッドに潜り込む。

（今やめたらみんなに迷惑がかかるかも……けど、顔を合わせるのがツライ……。こうしてる間にも、みんなが僕を責めてる……）

酷い自己嫌悪に浸っている。

はじめにとって、この1か月は最も楽しい時期だった。これまで避け続けた”青春”というものがこんなに素晴らしいものだったのかと、立ち直りかけていたところだっただけにこの挫折は大きかっ

た。

（いつまで逃げ続ける？　明日も、明後日も、ずっと……？　退部届…出すのか？　でも、出すためには部長に会わないと……。もう……）

「面倒、臭い」

そう口に出した時、アパートの前に車の止まる音がした。続いてはじめの部屋のドアをノックする音。

「お～い！　コリー！　出てこ～い！」

「先輩……！？」

訪問者は白戸だった。

「部長命令だ！早く出てこい！」

「部長が……？」

はじめがグズグズしていると、突然白戸の口調が変わった。

「あっ部長。もう帰っちゃうんすか？まぁ、コリーが出てこないならしょうがないっすね」

「部長が来てる……！」

はじめは急いで跳ね起き、ドアを開ける。

「部長！」

「ざ～んねんでした。部長は今ここには……」

バタン。

「あ～！　待て、コリー！　部長は今ここにはいないけど、他の所で待ってるから！　早く来いって！」

「……本当ですか」

疑惑の表情で、もう一度はじめはドアを開ける。

「ＹＥＳ！　俺が今までコリーにウソついたことがあるか？」

「……いくらでも」

「……」

「……」

……勝手に墓穴を掘る男である。

「と、とにかく今回は本当だ。コリー、阿倉浪才の墓って知ってるか？」

「あの、山の中腹にあるやつでしょう。小学校の遠足でいったことあります」

「そこで部長が待ってる。送ってやるから乗りな」

そう言って白戸は車の助手席のドアを開ける。

「なぜ墓地に……？」

「行って部長に聞け」

白戸がエンジンを回し、車を発進させた。

第４章・再試（前書き）

西条　壬織　（さいじょう　みおり）
２１歳・大学４年
小説家・唖倉浪才の隠れファンで、生前の彼に会ったことがある。
ちなみに、一つ年上の兄がいる。

第4章・再試

山道に入る直前で、白戸は車を止めた。

「こっからは一人でいきな。俺は帰るから」

「先輩は来ないんですか？」

「部長に来るなって言われてるんだよ。じゃ、頑張れよ」

白戸に見送られ、はじめは山道を登って行く。山道といってもきれいに舗装されているので、そう苦労はない。

唖倉浪才――以前少しだけ紹介した小説家である。この小説家は5年前に亡くなり、はじめが向かっているのはその墓だ。

「来たか、コリー」

白戸の言うとおり、部長はそこで待っていた。

「部長、どうしてこんな所で……」

「ここからは、町がよく見えるからな」

唖倉浪才の墓は、ちょうど町を見下ろすような形で立っている。画家のコナガワ（これも以前紹介した）がここから見える夕日を描いたというエピソードもあり、魅月町の観光スポットでもある。

「それで、用件は……？」

「再試験だ。お前がもう一度舞台に出られるかどうかのな」

「……えっ……」

はじめは困惑した。もう一度……？　なぜこんな場所で……？と。

「ここからは町全体が見える。逆に言えば、町中から見られているということだ」

「あっ…」

「それに、今回の演劇の原作者である唖倉先生の墓前だ。ここで演技をやってもらう」

「これが、再試験ですか」

「そうだ。相手役は私がやろう」

部長の演技を見るのは初めてだ。そして、町中から見られているという意識がはじめを硬くした。

「シーンはクライマックス。主人公がヒロインと別れて旅立つ場面だ」

部長の言葉も遠くから聞こえる。人の心は不思議なもので、本当に見られていなくても、「見られているかもしれない」と意識するだけで視線を感じてしまう。（実際、私が見ているのだが）部長の狙いはそれだった。はじめが町中からの視線を克服できるか。それ

が再試験だった。

「いいな、コリー。始めるぞ」

はじめの心が定まらないまま、部長が開始を告げる。

「ま、待って、ください！　まだ準備が…」

『次に会うのは、４か月後か…。長いね』

「！？」

部長の声色が変わっている。顔つきもだ。「舞台に上がると人が変わる」とはまさにこのことだ。

『でもちゃんと連絡が出来るだけマシだね。いつでも声が聞けるんだもん』

『……ソ、ソウ……ダナ……。』

カタコトだ。はじめはまたも緊張してしまっている。

しかし、そのまま部長は続ける。

『でも毎日ってのもさすがに味気ないね。週に一度手紙が来る、ぐらいがいいかな？』

『……カ、カな……。本と……ウにそうスル……か』

『……んーん』

部長はクスリと笑い、はじめの手を握る。

『やっぱり、毎日がいいな。淋しいもん』

『あ……カ……』

もう、声が出ない。ただでさえ緊張しているのに、部長に手を握れられているのだ。温もりが伝わり、顔が紅潮する。

『ウあ……あ……』

血液が滾(たぎ)り、神経が全開になる。グラグラと足もとが揺れる感覚に襲われ、思わず目を瞑った。

（もう、ダメだ……っ！）

昂ぶりに耐えきれず、はじめが逃げ出そうとした瞬間……。

『好き……』

「！？」

『1週間もガマン出来ないくらい、好き……』

ドクン。大きな音をたてて、心臓が震えた。

演技だとわかっていても、部長の言葉ははじめの心に深く突き刺さった。そして、部長の手に熱を帯びた力がこもる。

（ああ――）

許容量を超えた熱を受け、はじめの中でなにかが変わる。

（ここで逃げたら、それ……一番、カッコ悪い。それに……もっと面倒臭くなる）

『俺も……淋しい。けど、その分４か月後がすごく楽しみだ』

ゆっくりと、力強くセリフを言う。もう震えは止まっていた。

『そばにいなくても愛は伝わる。昔からよく言うだろ？』

『……うん。でも、それでもそばにいたいっていうのが、本当の愛だと思う』

『……それでも。それでも遠くに行ってしまうのが……』

『男の夢なんだ。でしょう？』

二人は手を握ったまま、しっかりと見つめ合う。

『いいよ……。私、夢を追いかけてる背中って、すごく好きだもん』

『……もう、時間だ』

『それじゃあ……待ってるからね。向こう着いたら、すぐに連絡してよね！浮気なんかしたら許さないからねっ！』

『ああ。絶対な』

『バイバイ……』

二人の手が離れ、はじめは背を向けて歩きだす。

その背中に、部長が声をかける。

「合格だ。よくやった、コリー」

第5章・本音

部長の声は、すでに元に戻っていた。余韻に浸っていたはじめはその声で現実に帰る。

「合、格……」

「ああ。ハトの言ったとおりだな。2回目は強いようだ」

白戸は全くのデタラメで言っていたのだが、部長はそれを引用した。

「明日からまた練習だ。君はまだまだ向上が目指せるから、しっかり励むように」

「は、はいっ！　ありがとうございます！」

「それではまた明日」

と言って部長は去ろうとしたが、ここにきてようやくはじめはあることに気付いた。

（今――部長と二人きり！？）

……遅い。が、まぁ何とか気付いたようだ。そして、この貴重なチャンスを活かそうとする。

「あの、部長。ヒロイン役、スゴク上手かったですね」

「……演劇をやる女性なら、自分がヒロインを演じる姿をイメージしてしまうものだ。割り当てられた役でなくとも、頭の中に浮かんでしまう」

「へぇ……」

部長が自らを”女性”と言ったことが、はじめには新鮮に感じられた。

「私も演劇をやり始めたころはヒロインに憧れていた。メインを飾りたいと思っていた時期があった」

「今は……違うんですか？」

「ヒロインは舞台の花とよく言われるが、私は他の花に強く惹かれたのだ」

「他……？」

「ああ。ヒロインには、そのキャラクターにもよるが桜、百合、ヒマワリなどの見た目に良い鮮やかな花のイメージがある。しかし、私があこがれたのはそのようなメインを飾る花ではない。……コリー。松の花を見たことがあるか？」

「松の花……？　いいえ」

と、言うよりも、はじめは松が花を咲かせることなど知らなかった。

「ある。赤い雌花と、黄色い雄花がな。これは今述べた花と比べる

とぐっと見劣りする。だが、じっと見てみるとなかなか面白い花だ」

「はぁ」

「松やそのほかの針葉樹は、花粉で生殖するのだが、虫や鳥に頼らず風に吹かれて花粉を散らす」

「あっスギ花粉とかですね」

「彩りや蜜の匂いで虫を呼ぶ必要がない。それ故にあまり目立たない花になっている」

「なるほど……」

わかったような、わからぬような表情ではじめは答えた。

「目立たないが、実を結ぶのには欠かせない存在。それが松の花なのだ」

「はあ……」

演劇から離れた話に、少しとまどっている。その様子を見て、部長は話を戻す。

「まあ、花といっても色々あるという話だ。少しややこしくなったようだが、長く稽古を続けていけば、いずれわかるだろう」

「そう、ですね。頑張ります」

「うむ。それと……お前もだ。ハト」

「ええっ！？」

と、言ったのははじめではない。部長が指さした方向の草むらに潜んでいた白戸の声だ。

「気付いてたんスか！？　部長」

「コリーを連れてきたらすぐに帰れと言ったのに、車のエンジン音が聞こえない。すぐにわかった」

草まみれになった白戸がきまり悪そうに出て来る。

「おう！コリー。お前やれば出来るじゃぁねぇかよ～。さすが俺が推薦しただけのことはあるぜ～」

「み、見てたんですか！？」

「いや～カッコよかった。ホレるね。あれは……」

「誤魔化すな」

「はい……」

いつもの部長と白戸のやり取りを見て、はじめは思わずクスリと笑う。

「お！　おお！　3年に一度しか見れないコリースマイル！」

「黙れ、ハト。……しかし丁度いい。お前の車でコリーを送ってや

れ」

「了解っす。んじゃ、コリー、先に車のところに戻っててくれ」

そう言って車のキーを渡す。

「はい。……部長、また明日からよろしくお願いします」

「うむ。こちらこそだ」

去って行くはじめを見送り、白戸は部長に向き合う。

「部長、一つ聞いてもいいっすか？」

「なんだ」

「あの手を握る場面で、『…好き』ってセリフはなかったような気がするんスけど」

そう言う白戸の手には丸めた台本があった。

部長はそれに気付き、……顔を赤らめた。

「……！　貴様……余計なことばかり覚えているなっ……！」

「ヒィッ！？　す、スイマセンッ！さよなら！」

文字通り逃げるように白戸は去って行き、あとには部長だけが残った。

「……久々の演技だったから、セリフを間違えただけだ……」

誰もいないのに、自分に言い聞かせるようにつぶやく。

……顔が赤いままなのは、夕日がさしたから……だけなのだろうか……？

最終章・閉幕

「お～い、コリー！学食寄って行かないか？」

大学に入って1年がたとうとしている、ある日のこと。呼びかけたのは白戸ではなく、はじめのクラスメートだ。

「いや、今日は早めにミーティングがあるから……」

「そうか。じゃあ、頑張れよ～」

部室に向かって歩きながら、はじめは思う。

（自分がクラスメートとあんな会話をするなんて、思いもよらなかったな……）

自分でもはっきりと自覚できる程、大きな変化だった。

歩く姿も以前とは違う。どこか自信を感じさせる。

「こんにちは」

「こんちは～コリー」

部室のドアを開け、数人の部員と挨拶を交わす。

「ねぇ、コリー君、聞いた？」

近くに座っていた同じ学年の女子が話しかけてくる。

「部長、東京の劇団にスカウトされてるって」

「ああ、その話なら……」

すでに部長の口から聞いていた。そして、大学卒業後に東京に行くことも。

「スゴイよね～部長。あの劇団って、有名だよね」

「こんな田舎でも名前が知られてるぐらいだからね」

「うん。こんな田舎でも……」

……そう何回も田舎、田舎と言わないでほしい。

「将来は大女優かぁ……いいなぁ……」

その女子がうっとりとした顔になった時、本人が入ってきた。

「えー、例によって約1名遅刻がいるが、次の舞台のミーティングを始める。今回の脚本は皆の希望通り……」

バタバタバタ……。部長の話し声を遮るように足音が近づいてくる。

（3……2……1……0）

はじめの心の中のカウントに合わせて、白戸が飛び込んできた。

「よっしゃあ！　ギリギリセー……」
「アウトだ。来週の掃除当番もお前に決定だな」
ハハハ……と、部員達が笑う。
「いや～参った参った」
頭をかきながら、はじめの隣に座る。
「よくそんなに遅刻する理由がありますね」
「お・ま・え・のせいだよ。コリー」
「僕……？」
「お前に渡してくれってファンレター、大量に預かってきたぜ。……一通ぐらい、ラブレターが混じってるかもな」
ニヤリと笑みを浮かべながら、はじめの脇腹をつつく。
「……伝書バト……」
「うるせぇ！　コリーのくせに！」
「うるさいのはお前だ」
「はい……」
白戸が静まり、ようやく話が再開する。

「……それと割り当てだが、主役は部外からの希望通り……」

部長がはじめを見て、二人の目が合う。そして、部長は静かに微笑み……は、しなかったが、そんな気がした。

花は、遅蒔きながらもゆっくりと開いてゆく――

この話は、ここで幕を閉じる。その後、部長は卒業して東京に行ったのだが、私は魅月町…この町の外のことは何も知らない。しかし、「3年に1度しか見れないコリースマイル」が度々見られることから、大体の想像はつく。

この町が、二人の名優の出身地としても有名になるのは、まだ先の話――

ではここで一つ、締めの一言を言わせてもらう。オホン。

『恋の力は偉大である』

ん？　この言葉、まえに誰かが言っていたような……。

それはさておき、この町にはまだまだ多くのドラマがある。今度ここを訪ねてきたら、また他の話をお聞かせしよう。

……私の名前は魅月町――また、会う日まで。ごきげんよう。

最終章・閉幕（後書き）

作中で魅月町が述べたように、これからも同じ町を舞台にした、他の話を書いていこうと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2009d/

魅月町・針葉の花

2010年10月10日01時44分発行